

RAILWAY & CINEMA

二〇〇三年以来約八年間、三十三回にわたり三十四本の映画を紹介してきました。かなり偏見があり、その上文章表現もつたない私の映画評論を長い間読んでくださった読者の皆さまに深く感謝申し上げます。この連載の対象となるような鉄道映画が全く無くなつたというわけではありませんが、主要なものを取り上げたのではないかと思いません。そこで、今回と次回は、なぜこの映画を取り上げないのかといった読者の皆さまの疑問に答えることを中心に「鉄道と映画」をレビューしてみたいと思います。

ご紹介する対象とした映画は、単に名画というだけでなく、鉄道が映画の中で重要な役割を果たし、かつ鉄道が登場するシーンが印象的なものを選びました。ただし、いずれも私の目で見た評価ですから、相当に主観的なものであることを強調しておきます。例え名画であつて鉄道が登場するシーンが印象的であっても、鉄道が重要な役割を果た

たしているとは言いえないものは、迷つた末に外しました。例えば、ミケランジェロ・アントニオーニの名作「情事」です。主役のモニカ・ヴィッティが鉄道から身を乗り出すシーンなど実に印象的ですが、映画全体から見ると鉄道が重要な役割を果たしているとは言い難いのではないかと考え、外しました。同様にフェデリコ・フェリーニの傑作「青春群像」。最後に主人公が鉄道で故郷の町を離れる場面、非常によくできたシーンですが、鉄道が登場するのはこの最後の場面だけなので、大変迷つた末、やはり見送りました。ほかにもビクトル・エリセの「ミツバチのささやき」などもこのような考え方から対象としませんでした。一方、ポール・ニューマンとロバート・レッドフォードが素晴らしい演技を見せた「ステイング」は、鉄道が詐欺の重要な舞台として使われており、編集部の方からも推薦され、ずいぶん迷いましたが、これらのシーンで鉄道が印象

鉄道と映画

34

連載を終えるにあたって 前編

「鉄道と映画」で

紹介しなかつた作品の、
いくつかの理由について。



文・羽生次郎
text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は公益財団法人笹川平和財団・会長を務める。フィルム・コミッション（FC）への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

的であつたかと自問すると、必ずしも印象的とは言えないと考え、やはり外しました。また、松本清張原作、野村芳太郎監督の「張り込み」。前半に出てくる刑事たちが夜行列車に乗って東京から九州へ行く場面、昭和三十年代前半の長距離鉄道の様子が実に良く撮れていたし、映画も傑作とは言えないが佳作と考え、取り上げようと思ひ、何回かDVDを見ていううちに果たして重要なシーンか否か迷うようになり、とりあえず取り上げるのを見合わせました。次に、鉄道が重要な役割を果たし、かつ鉄道シーンの印象が強くても、映画自体が名作、傑作、佳作に当たらないものは除外しました。この範疇に属する典型的なものには、ハリウッド製の鉄道を舞台にした冒険活劇です。「暴走列車」「カサンドラ・クロス」「軍用列車」「北西戦線」、最近では「アンストッパブル」などです。いずれも時間を割いてみる価値があるかどうかと考えるとイエスとは言い難いと思います。ハリウッドのアクション映画をことさら高く評価してはいませんが、軽蔑しているわけでもありません。それが証拠には「サブウェイ・パニック」や「北国の帝王」などは佳作と考え、取り上げています。迷つたのは「フレンチ・コネクション」です。この映画のサブウェイを舞台にしたアクションは迫力があるし、ジーン・ハックマン演ずるポパイ刑事は魅力的でした。今にしてみれば取り上げてよかったのではないかと思つていきます。

(次号に続く)